# 『小公子』における一、二人称代名詞

房 極 哲*
banggc@sunchon.ac.kr

Contents

1. はじめに
2. 資料及び研究方法
3. 『小公子』における一人称代名詞
4. 『小公子』における二人称代名詞
5. 終りに

Abstract

本論文では、明治期における待遇表現の考察の一環として、明治期の翻訳小説『小公子』(バーネット作、若松賤子(1864—1896)訳：女学雑誌、227号—299号：明治23年8月—明治25年1月)における一、二人称代名詞を性差の観点から考察した。考察の結果、次のようなことが分かった。

一人称代名詞は、女性の場合、現代日本語と同様に「わたくし」と「わたし」に使用の偏りが見られる。一方、男性の場合は、「わたくし」「わたし」以外に「わし」「おれ」「おらあ」「おいら」「こちとら」「てまへ」「ぼく」「ぐろう」など多様であることが分かった。男性の場合は、古めかしい言い方が残っており、一人称代名詞からは高年齢層においては、江戸語の名残もまだ残っている。江戸語の名残がほとんど廃れていた女性とは対照的であろう。

二人称代名詞は、男女共に「あなた」「おまへ」が主たる使用である。そして「おまへさん」の使用は男女共に残っているが、使用例は少ない。男性においては、一人称代名詞と同様に個性豊かである。要するに、男性の二人称代名詞は「おめえ」「きみ」「きさま」「ごぜん」などが使われている。なお、『小公子』に残された男性のみ使っている二人称代名詞は待遇価値の低いことが特徴的である。

以上、一・二人称代名詞について男女の差異から総括してみると、女性の場合は簡素化していく傾向(明治20年代に既に、現代日本語の人称代名詞とほぼ一致する)が強いようである。しかし、男性の場合は一・二人称代名詞の簡素化があまり進んでいないし、待遇価値の低い一・二人称代名詞も多く、江戸語の名残も残っており、バラエティーに富んでいたことが分かった。

Key Words：小公子、人称代名詞、明治期、性差、使用場面

* 順天大學校 日語日文學科 助教授.

# 1. はじめに

明治期はいわゆる近代国家が成立した時期である。新しい時代になって社会制度が著しく変化し、それに伴って、言語面とりわけ待遇表現が大きく変化したと考えられる。基本的には従来の階級制度が崩壊し、新たな制度による四民平等の意識によって、待遇表現も大きく変わった。また学校教育の普及、標準的な日本語の言い方は全国に及ぶようになった。明治20年代になると、言文一致の影響もあり、文末表現「です」「ます」「でございます」などのような指定の言い方の一般化などが注目されていた。人称代名詞に関して言えば、江戸時代に比べると人称代名詞の数の少なさ・減少が指摘できる。すなわち、方言や限られた社会階層の人しか使わない人称代名詞を除くと、人称代名詞は現代日本語のそれと近づくようになったのである。このような人称代名詞の変化の推移が起きた時期は明治20年代であると言えよう。人称代名詞について言うならば、明治初期は江戸期の名残が強く残っているし、明治後期には現代日本語とほぼ一致していくようになる。そこで、本論文では、明治20年代の人称代名詞に焦点を当てながら、考察を進めていきたい。

本論文では、明治期における待遇表現の考察の一環として、明治期の翻訳小説『小公子』(バーネット作、若松賤子(1864—1896)訳：女学雑誌、227号—299号：明治23年8月—明治25年1月)における一、二人称代名詞を性差の観点から考察することを目的とする。

また、本論文では、日本語の小説では、通常の音声言語(実際の会話)より多くの「性差マーカー」が使用されているという事実[1)]を踏まえつつ、『小公子』に現れた一、二人称代名詞を調査する。なお、『小公子』を調査の対象とした理由は、『小公子』は明治20年代はじめごろの翻訳としては珍しく純然たる口語体の名訳であるし、登場人物の多様性からみて、性別、世代別といった人称代名詞の分析にも適した作品であるからである。

---

1) Vanbaelen, Ruth(2003)を参照されたい。

## 2. 資料及び研究方法

資料『小公子』については、房(2006)で詳しく紹介しているので参照されたいが、ここで論の展開上、必要な部分だけを紹介したい。『小公子』はFrances Hodgson Burnettの世界的ベストセラー、"Little Lord Fauntleroy"(1886年刊：ロンドン：明治19年)を明治23年に若松賤子が翻訳したものであり、明治翻訳小説の傑作と言われている。そして、1897年博文館から単行本『小公子』が出版された。それまで漢文体が主流であったのに対し、『小公子』は当時の口語を生かした言文一致体で書かれ、名訳として長く詠み継がれた。

本論文で使う資料は、若松賤子訳の『小公子』として明治23年から明治25年にかけて『女学雑誌』に掲載されたものである。『女学雑誌』の第300号に掲載された在米の梅馨生が書いた「小公子に就いて」の内容から重要な事柄を紹介しておこう。

> 此書の反訳を企図せる所以のものは固と名を売り利を護んが為に非ず…今世紀に希有と称する此好著の其挙なきを恨み且つ紛々たる彼の俗社会をして少しく此書の如き藹々たる人情の和気を翫味せしめんと願ひたればなり
>
> …一日も早く此書の我邦に披露せられたるを喜び更に其の余の如き陋書に依らざるして而かも女流の優美なる筆を借りたる事を満足に思ふ而己。
>
> …左れば「小公子」は少年文学と冠せられたれども如何なる種類の人々も必読の書にして…(下線は筆者)

上記より『小公子』の翻訳の意図や女性が訳したことに対する称讃や、また『小公子』が当時の必読書であったことが分かるだろう。また、『小公子』の読者対象は、むしろ大人であったことも序言や評論集、巻末の書籍広告などから分かる。

ここで、若松賤子という作家が、どのような言語習得の過程で成長してきたのかについて触れてみたい[2)]。彼女はキリストの精神に徹し、当時の封建主義的

2) 詳細は房(2006)を参照されたい。

な家庭生活に西欧の新しい倫理感を融合させようとした。このような彼女の「女学雑誌」との深い関係や歩んできた身の回りの環境(とりわけ教育環境)などを考えると、言語習得の環境もキリスト教の影響が強かったと思われる。若松賤子によって翻訳された『小公子』は、キリスト教の愛の精神を非常によく表しており、明治20年のはじめごろの翻訳としては珍しく純然たる口語体の名訳であり、「人称代名詞」の研究に敵した作品であるといえよう。

本論文では、明治期の一、二人称代名詞がどのようなものであったのかを明治期に刊行された翻訳小説『小公子』の会話文を通して調査し、考察を進めていく。そして研究の方法は、話者の性別によって、どのような言語要素、具体的には一、二人称代名詞が、どのように使い分けられていたのか、特に話し手の社会階層と性差による使い分けについて考察していく。従来、明治期の文学作品を対象とした文末表現、とりわけ終助詞の性差についての研究は多いが3)、明治20年代の一、二人称代名詞の記述的な考察はあまり行われていない。ここに本論文の意義があり、今後も明治期の待遇表現、敬語の記述的な研究を続ける必要性があると考えている。

## 3.『小公子』における一人称代名詞

『小公子』に現れた一人称代名詞を性別に分けて示すと、次の<表1>のようになる。

<表1>『小公子』における一人称代名詞の使用者数

| 性別＼一人称代名詞 | わたくし | わたし | わし | おれ | おらあ | おいら | こちとら | 手前(てまへ) | 僕(ぼく) | 愚老(ぐろう) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男性の使用者 | 1 | 1 | 6 | 5 | 3 | 2 | 1 | 4 | 2 | 1 |
| 女性の使用者 | 3 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |

3) 例えば、主に女性語に焦点を当てて論じている研究が多いが、詳細は房(2006)を参照されたい。

## 3.1. 女性の一人称代名詞

一人称代名詞は女性の場合、「わたくし」「わたし」が中心である。これは明治初年に比べると、一人称代名詞の種類が限られているのが特徴である[4)]。「わたくし」「わたし」の使用者は「エロル夫人」「ロリデール夫人」「ヴィヴィアン、ヘルベルト(若い婦人)」「ドウソン(侍女)」など上層階級の婦人層や侍女が主に用いている。話し手と相手との使用関係を見ると、用例(1)(2a)(3)は、相手はすべて「セドリック：フォントルロイ」である。すなわち、話し手は相手が自分より年下の場合に「わたし」を使っているが、ある意味で相手「セドリック：フォントルロイ」の身分を考慮したことも考えられるだろう。

また、用例(1)と用例(4)で、心優しい慈悲深い人柄のエロル婦人は内外(ウチ・ソト)関係が働いていた結果「わたし」と「わたくし」を使い分けているようである。身内の「セドリック：フォントルロイ」に対しては「わたし」を使用し、親近感を表している。しかし、外の代言人のハヴィシヤム・ハ氏(伯爵の弁護士)に対しては「わたくし」を用いて、話し手の品位を保つとともに話し手が相手との距離を意識した結果、一番丁寧な一人称代名詞「わたくし」を選択している。用例(2a、2b)からも「ロリデール夫人」(大叔母)は「セドリック」に親近感を表すため「わたし」を使用しており、夫に対しては一人称「わたくし」を用いることによって、自分の品位と相手への謙遜を表明したことが窺える。

なお、下層階級では、用例(5)のように「ドウソン(侍女)」が「わたくし」を使用することによって、相手のメロン夫人への配慮(上下関係)を窺わせる。また、女性が手前(てまへ)を一人称・自称として使っている(用例6)は、「エロル夫人」がしとやかにニッコリしながら、侯爵に言う場面である。つまり、「てまへ」は話し手がやや謙遜していう語であることが言える。

(1)　セデーや、わたしの家といふのは、お城から大して遠いのではないよ、少ふし斗りしか離れてゐないから、おまへが毎日馳けて来て逢る位なのだよ、

---

4) 明治初年(『安愚楽鍋』(明治4—5)と『塩原多助一代記』(明治17))の女性の一人称代名詞には「わちき」「わっち」「わたい」などが使われている。

(四回下、エロル夫人：母親→セドリック：フォントルロイ)

(2a) わたしは、おまへのカンスタンシヤをばだよ、おまへのおとうさまは、わたしの秘蔵だつたが、おまへは亦大層よふ似ておいでだよ、
(十一回丙、ロリデール夫人：大叔母→セドリック：フォントルロイ)

(2b) 併しネ、先ほどはあの婦人を憎んで居ない様ですよ、わたくしにそれ丈は分つて居り升。
(第十一回(丙)、ロリデール夫人：大叔母→夫)

(3) フォントルロイの若様、一寸こちらへ入らつしやいましな、そして、あなたがそんなにヂツト私(わたし)を見て入して、何を考へて入つしやるか伺ませう、(十一回丁、ヴィヴィアン、ヘルベルト(若い婦人→セドリック：フォントルロイ)

(4) 私(わたくし)は子供の為に誠に気遣はしく御座り升。アノ様にあどけないので御座り升もの!
(三回中、エロル夫人→代言人：ハヴィシヤム・ハ氏：伯爵の弁護士)

(5) あなた御前の仰ならば、黙つても居ませう、ですがネイ、わたくしの様なお婢でこんなことをあなたへ申し上てどんなもんですか存じませんが、(中略)わたくし、なんぞは可愛そうで仕方が御座いませんよ、ソレニマアどふでせう、お美麗こと、どふ見ても殿様に生れついておいでなさるじや有ませんか、(七回甲、ドウソン(侍女)→メロン(取締り)夫人)

(6) 手前(てまへ)が参る方がキツト御都合に宜しひのですか? (十五回、エロル夫人→侯爵)

以上、上記の用例から分かるように、女性の代表的な一人称代名詞「わたくし」と「わたし」は明治20年代頃には丁寧な高い敬意を表す一人称であったと言えよう。そして「わたし」は二人称代名詞「おまへ」「あなた」と対をなして使われていること、「わたくし」は二人称代名詞「あなた」と対をなしており、文末表現「ございます」「ございます」と共に使われていることなどを考え合わせると「わたくし」の方が最も丁寧な一人称代名詞であったと考えられる。また、『小公子』の「わたくし」の使用者の傾向(上層階級の婦人層が使用すること)は明治30年代でも同様に見られ、『社会百面相』(明治35年)[5]の「わたくし」の使用傾向

5)「社会百面相」は、内田魯庵35才の明治35年6月東京博文官から刊行された。内田魯庵が書い

と一致している。『社会百面相』における「わたくし」の主な使用者を見ると、上層の婦人層(例えば、貴婦人、女学者、代議士夫人など)に位置する人が主に用いている[6)]。このように女性の「わたくし」は明治期を通して最も待遇価値の高い一人称であったと言えるだろう。

## 3.2. 男性の一人称代名詞

男性の一人称代名詞は女性に比べると、<表1>から分かるように種類が多く個性豊かである。それぞれの用例を取り上げながら見ていく。『小公子』に現れた用例は、わし(用例7、8)わたし(用例9、10)わたくし(用例11)おれ(用例12、13)おらあ(用例14、15)おいら(用例16)ぼく(用例17―22)手前(てまへ)(用例23―25)愚老(ぐろう)(用例26)こちとら(用例27)などがある。

年輩の「ホッブス」と「ヂック」は「わし」を使っている。例えば、「ヂック(靴磨屋)」は「ホッブス(パン屋のおじさん)」に対して、「わし」と「わたし」を使い分けている(用例8―10)。二人は親しい関係であると共に、二人とも身分は高くない点が共通している。また、「ホッブス」は「ヂック」に対して、「おれ」と「おらあ」を使い分けている(用例12、14)。ここから少なくとも「わし」「おれ」「おらあ」などは親しい男性同士の間で、打ち解けた場面でよく使われる一人称代名詞であることが確認できる。

また、男性が使っている「わたくし」についてみると、使用者「ウィルキンス」(馬夫)が「セドリック)」に対して使うのみで、女性のように上層の人が自分の品位を保つための使用例は見られない。男性の「わたくし」の使用は用例(11)のように身分の低い人が相手の身分を強く意識して自分を丁寧に言う時である。

(7) そんな奴知つてゐてたまるものかよ、わしの店へでも這つて見るが好い、どうしてやるか。

---

た小説として短編30、中・短編7、附録(一つ)などがある。当時の時事批評小説として、明治30年代の世相を代表する社会階層の言葉が典型的に活写されている。

6) 房(2002)を参照されたい。

弱いものいぢめをする圧制貴族め、こゝらの明箱へなんぞ腰をかけさせてたまるものか?。(一回下、ホップス→セドリック)

(8) さうとも。わしはどこまでも加勢する気なんです。あんな好いた様な子はなかつたから。(十四回甲、ヂック→ホップス)

(9) 大店なんかにアありさうなものんですがネ、ダガ、わたしらア、見たつて知れねいだらうと思ふネ。(十二回乙、ヂック→ホップス)

(10) 旦那、わたしもあんな好い奴見たことがねいんです。(第十二回(甲)、ヂツク→ホップス)

(11) ジャア、わたくしが下りませう。(九回乙、ウィルキンス(馬夫)→セドリック)

(12) フン、さうか、おめへ来る時、持つて来ネイ、おれが代を払ふから、侯爵のことが書いてあるんなら、どれでもみんな持つて来るが好ゼ。(十二回乙、ホップス→ヂック)

(13) おれも知らない様だ、アメリカの遊びだろうな、クリケツトに似て居るか?(七回乙、侯爵→セドリック)

(14) フーン、おらあ呆れけいつた!(十二回丙、ホップス→ヂック)

(15) おらあ、あんなに雑作もなく憤れツちまつて、あんなに威勢の好のに馬術、をせいたこたアねへんだ。
あゝいふんなら後ろから供をしてつても、心持が好いや。(十三甲、ウィルキンス→御者)

(16) おいらアたまげつちまつた。(十二回乙、ホップス→番頭)

次に、男性が使っている「ぼく」「手前(てまへ)」「愚老(ぐろう)」「こちとら」についてみたい。「僕(ぼく)」の使用者は「セドリック」と「ハリソン(代言人)」である。「セドリック」は「ハヴィシヤム・ハ氏:伯爵の弁護士」、「ドリンコート侯爵」、「ヒツギンス」(壮年を過ぎた百姓らしき者)や母親の「エロル夫人」、「ロリデール夫人」(大伯母)などすべての人に対して「ぼく」と言っている。目上の人に対して使っており、「です、ます調」の丁寧な表現と共に「ぼく」を用いる用例が多く見られた。これは「セドリック」がすべての人に人懐っこい性格(物怖じしない性格、純真さと思いやりのある優しい心を持っている性格)であったからであろう。房(2003)によると、「ぼく」は明治20年代「書生」「若紳士」たちに多く使われていた一人称代名詞である。当時の「ぼく」はほと

んど対等関係の相手との間で使用されていた。「セドリック」が自分の母親(エロル夫人)やお祖父さん(利己的で気難しいドリンコート侯爵)に「ぼく」を用いていることから、「ぼく」を子供が用いる時は、目上に対しては使えないとか、目下に対してのみ用いることができるとかなどの制約はないのであろう。

(17) オヤ／＼それは大変な昔しのことですね。おぢさんそれを僕(ぼく)のかあさんに話し升たか?(三回上、セドリック→ハヴィシヤム・ハ氏)

(18) 僕(ぼく)、かあさんのこと考へてたんです、僕……何んだか変ですから、チツトあつちこつち歩いて見ませう。(六回戊、セドリック→ドリンコート侯爵)

(19) ナニ、僕(ぼく)は、たゞ手紙を書いた斗ですよ、それを為すつたのは、お祖父さまです、(八回乙、フォントルロイ・セドリツク→ヒツギンス：百姓らしい者)

(20) かあさん、僕(ぼく)は侯爵になり度ないよ、ダツテ僕の友だちに侯爵なんかになるものは一人もないんだもの、かあさん、侯爵にならなくつちやどうしてもいけないの? (二回上、セドリツク→エロル夫人)

(21) 僕(ぼく)、とうさんに似てるつて、いわれるの大好ですよ、ダツテ、みんなとうさんが好だつた様ですもの、(十一丙、フォントルロイ・セドリツク→ロリデール夫人(大伯母))

(22) 左様さ、これが思ひ通りにいけば、大したことになります。フォントルロイ殿は固より、僕(ぼく)にとつても非常な運定めになり升。それで兎に角事実の探索にとり掛つて、差支は有りません。(第十四回(乙)、ハリソン氏：代言人→ホ氏)

用例(23)(24)の「てまへ」は、ウィルキンス(馬夫)が老侯に対して礼を表し、面白そうにいう場面である。用例(25)の「てまへ」は、ハヴィシヤム・ハ氏(伯爵の弁護士)が侯爵に対して、書斎の中で処置法に付て協議された時である。ここから「手前(てまへ)」の一人称・自称を見ると、用例(23)(24)のように謙遜している場合と用例(25)のように年輩の話し手が相手の人に対して自分をさす時に使っている。用例(26)の愚老(ぐろう)は、年取った老人(ハヴィシヤム・ハ氏：伯爵の弁護士)が自分を謙っていった言い方である。用例(27)の「こちとら」は

身分の低い給事(タマス)が使用しているが、「ぐろう」と「こちとら」いずれも当時一般的な言い方ではないことが言えよう。

(23) 先程落ましたが、手前(てまへ)が拾ひ挙げる暇もない程で、御座り升た、(九回甲、ウィルキンス→老侯)

(24) 御前、どふいたし升て、そんなこたあちつとも御存じない様です、手前(てまへ)も、これまで随分若様方に馬乗のお稽古を申したことが有升が、此若様みた様にきつくつて、一処懸命なあ始めてです、(九回甲、ウィルキンス→老侯)

(25) 手前(てまへ)が婦人に面会いたして三回に及び升頃、余程心に疑を生じて参り升た。(十五回、ハ氏→侯爵)

(26) イヤ、お腹がアメリカの御婦人で、此弊が有るといふ処は一向見へぬ様で御座り升。愚老(ぐろう)は子供のことは至つて疎い方で御座りますが、いづれかといへば、先立派な若君と勘定いたしました。(ハ氏→老侯)

(27) 憚りながら、あのロツヂに居る方は、ソリヤ、アメリカ生だらうが、さうでなからうが、あれこそ、本当の品のある方よ。片眼しか開いてないだつて、その位はこちとらにやア知れらア、それだから、あそこへ始めて行つた時、直ぐとヘンレにさういつたんだ。(十三回甲、タマス：給事→出入りの代言人)

以上、一人称代名詞を述べてみたが、女性は一人称代名詞「わたくし」と「わたし」に集中しており、女性性(相対的に女性が使用)の強い語が小説『小公子』の世界で反映されたことが考えられる。ここで、考えられるのは『女學雑誌』の性格の一つである啓蒙性から照らし合わせると、女性の一人称代名詞は改まった言い方に制限された可能性もある。もう一つは作品の登場人物の属性、制約によって「わたくし」と「わたし」に使用が限られたかもしれない。

一方、男性の場合、一人称代名詞は多様であり、豊富であることが分かる。これは明治期を通じて言える現象であり、『小公子』においても明確に反映されたのである。男性は女性に比べると、社会的に自分の言説を述べる機会に恵まれており、各々の場面に応じて、相手との人間関係を考慮しながら、話し手みずから適切に使い分けていたことが指摘できる[7)]。

# 4.『小公子』における二人称代名詞

『小公子』に現れた二人称代名詞を性別に分けて示すと、次の<表2>のようになる[8]。

<表2>『小公子』における二人称代名詞の使用者数

| 性別＼二人称代名詞 | あなた | おまへさん | おまへ | おめえ | 君(きみ) | 貴様(きさま) | 御前(ごぜん) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男性の使用者 | 2 | 1 | 6 | 2 | 1 | 1 | 3 |
| 女性の使用者 | 5 | 1 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 |

## 4.1. 女性の二人称代名詞

女性は「あなた」「おまへさん」「おまへ」を使用している。<表2>から分かるように、女性は男性に比べると二人称代名詞の数が少ない。「あなた」の使用を見ると、「メロン夫人→代言人：ハヴィシヤム」(用例28)、「ロリデール夫人→侯爵」(用例29a,29b)、「ドウソン(侍女)→メロン(取締り)夫人」、「ヴィヴィアン、ヘルベルト(若い婦人→セドリック」などである。とりわけ、(29b)の用例を見ると、「あなた」の待遇価値は相当高いことが言えそうである。また、(28)の用例からも「メロン夫人」は「代言人ハヴィシヤム」に対して、嬉しさうな顔になっていう場面で相手に向けての高い待遇価値が保たれている。

次に「おまへさん」についてみると、使用例は少ない。「荒物屋のおかみさん」が「侯爵」にだけ使っている(用例30)。「おまへさん」は明治35年頃には廃れていく傾向が指摘できるが[9]、『小公子』においても身分の高くない「荒物屋のおかみ

7) 女性において、一人称代名詞が「わたくし」と「わたし」に集中化するのは、いろいろな要因が考えられるが、女性らしい品位(教養)のある言い方、作品『小公子』に現れた女性の登場人物の属性を翻訳者の若松賤子が考慮した結果、さらには学校教育の影響も関わってくると思われる。

8) この他、幼い主君を敬っていう語として「若様」、「若君」などがあるが、二人称代名詞として扱っていいかという問題もあり、ここでは省略する。

さん」に使用が限られており、明治20年代で既に使用が無くなりつつある。そして『小公子』を見る限り、「あなた」を使用する人たちは「おまへさん」を用いていないようである。

(28) いづれでお眼通りいたしても若ぎみをまちがふことは有り升まい。お顔も御様子もそつくりエロル様で御座ります。**あなた、**今日は誠におめで度ことで御座ります。(六回甲、メロン(取締り)夫人→代言人：ハヴィシヤム)

(29a) それで、あのお袋は**あなた**をなんと思つて居り升。(第十一回(丙)、ロリデール夫人→侯爵)

(29b) わたくしは早速エロル夫人を訪問する積りですから、若し**あなた**御異存があるなら、おつしやつて頂戴したう御座い升よ。(第十一回(丙)、ロリデール夫人→侯爵)

(30) デモ、**おまへさん**、其子が又可愛いくつて／＼、秘蔵／＼で自慢で／＼しよふがないもんだから、こんどのこつて、丸で、狂気の様ですと。それにネイ、**おまへさん**、こんどのは先の若様のお袋さんとは大違ひで、お品も何もない女ですと。(十三回甲、荒物屋のおかみさん→侯爵)

「おまへ」についてみると、用例(31)は「エロル夫人」が悲しそうな眼つきで窓から外を眺めながら、「セドリック」に言う場面である。すなわち、母親が子供に対して「おまへ」と言っている。遠慮のいらない身内に対して、要するに、心理的な負担がかからない目下の相手に「おまへ」をごく自然に使用している。目下への親愛の気持ちを込めて用いている用例が「おまへ」の主たる用法である。用例(32)、(33)もほぼ同じことが言えるだろう。当時年齢の高い女性が目下に対して、軽い気持ちで相手を呼ぶ時に「おまへ」を使っており、待遇価値は高くないことが言えるのではなかろうか。

(31) セデーや、おとつさんが入つしつたら、矢つ張りそうさせ度と思召すだろうとわたしは思ふのだよ。
おとつさんは大層おうちを恋しがつて入つしやる方だつたよ、そうして、

9) 小島(1974)の指摘によれば、明治期になると「おまへさん」は使用が減少し、「あなた」に比べて待遇価値(敬意)は低下したことが分かる。

おまへはまだ年は行かず、分るまいが、そこには色々考へなければならぬ都合もあるのだからね、全体、わたしがおまへを引留めて遣なければ大層我侭な母になるのだよ、おまへがやがて成人すれば何も彼もスツカリ分り升よ。(二回上、エロル夫人→セドリック)

(32) メレや、わたしはお前がこゝに居て呉て嬉しいよ、おまへの顔を見た計りで、心が落着く様だよ、処慣れないで変なのが、おまへが居るのでよつぽど心やりになるよ。(五回中、エロル夫人→メレ(侍女))

(33) おまへのおとうさまは、わたしの秘蔵だつたが、おまへは亦大層よふ似ておいでだよ、(十一回丙、ロリデール夫人：大叔母→セドリック：フォントルロイ)

## 4.2. 男性の二人称代名詞

男性が使用している二人称代名詞は、男女共用の「あなた」「おまへさん」「おまへ」以外に「おめえ」「きみ」「きさま」「ごぜん」などがある。男性のみに使用が見られる二人称代名詞「おめえ」「きみ」「きさま」などは待遇価値が低い点で共通している。当時、男性は女性に比べると、待遇価値の低い二人称代名詞を個性豊かに使い分けていることが指摘できる。

「あなた」の使用を見ると、用例(35)(36)は相手をある程度意識した丁寧な言い方である。特に、用例(35)は、「フォントルロイ：セドリツク」は非常に感激しながら、無邪気な眼で、ヴィヴィアン嬢を見詰めながら「あなた」と言っている場面である。また、用例(34)のように侍女(ドウソン)への使用では、話し手「セドリック」の性格を描くための表現効果(ドウソンに手を出す場面)を狙った側面が強いので、男性の一般的な言い方として考えにくい。次に「おまへさん」は女性と同様に使用例は少ない。その使用も年輩の人が代言人に対して使用しているのみで、待遇価値も「おまへ」の方へ近づいているようである。

(34) あなた御機嫌は如何?、僕を世話しに来て呉れて、誠に有難う。(七回甲、セドリツク→ドウソン)

(35) 僕はネ、かあさんを除ければ、あなたの様な奇麗な人見たことがないと思ふんです、ダケド、マアかあさんほど奇麗な人有りやしませんからネ、

僕、かあさんは世界中で、一番の美人と思つてるんです。(十一回(丁)、フォントルロイ：セドリツク→ヴィヴィアン嬢)

(36) チト申悪い事ですが、老侯は尊夫人(あなた)に対してエー、其……ひどく打とけては居られぬので、イヤ御承知の通り、老人と申者は兎角偏頗な者でナ、老侯も基偏頗心の甚はだ強い方で、一度思ひ込だことは中／＼解にくいのです、(二回中、ハ氏→エロル夫人)

(37) おまへさん、一時間いくらといふのでもかまわねいから、よく調べて貰いていんだ。
わしが一切呑み込んでるから。ブランク町の角の万屋ホツブスといふんだ、宜しふがすか。(十四回乙、ホッブス→ハリソン氏：代言人)

「おまへ」「おめえ」についてみる。「おまへ」の男性使用を見ると、用例(38)は打ち解けた場面で、「ホッブス」があっけにとられながら「セドリツク」のまじめであどけない顔を見つめながら、「おまへ」と言っている。つまり、隔意のない目下の相手に対して用いている。用例(39)は侯爵が自分の社会的な地位を意識した尊大な印象を与えている。「おめえ」は用例(40—41)に挙げたように、親しい対等関係で使用しており、しかも罵る場面で使用されていることも鑑みても相手に対する敬意は無いと言える。また、相手を「おまへ」や「おめえ」と呼ぶ時は、一人称代名詞「おれ」が使われていることに注目したい。「おれ」が持っている私的な性格を考えると、私的な場面(身内)で「おれ」と対をなしながら、「おまへ」「おめえ」が使われている。

(38) おまへのおぢいさんとハ、それハ一体、誰なんだへ?(二回上、ホッブス→セドリツク)

(39) おまへのいふ通りだ、中々見処のある奴で、大分おれとは仲よしだ、おれを此上もない気の好い、慈善家だと思つて居のさ、(十一回丙、侯爵→ロリデール夫人)

(40) おめへは、侯爵だの、城だのといふこと何か知てるか?、おれはモツト委しいことが知りたいと思ふんだ。(十二回乙、ホッブス→ヂック)

(41) おめへ、勝手に食ふが好いよ。(十二回乙、ホッブス→ヂック)

「きみ」「きさま」「ごぜん」についてみる。語種からみて漢語系の一人称代名詞は男性性が強い。「きみ」は男性だけ使用しており、対等関係や目下の相手に対して使っている。そして、「ぼく」と対をなして使用する傾向があるという先行研究の指摘がここでも当てはまる[10)]。

「きさま」は、目下に対する卑称の二人称代名詞として使われている。用例(44)から分かるように、「侯爵」が「馬夫」に対して、罵る場面(或は相手を冷ややかに見ている場面)で「きさま」を使っており、卑罵語的な性格が見受けられる。「ごぜん」は、相手を敬っていう場合に使われている。用例(45―47)を見ると、話し手と相手との人間関係は身分の高い「侯爵、フォントルロイ」に仕えている人が相手を敬って呼ぶ二人称代名詞であると言える。

(42) 僕(ぼく)は君(きみ)と別れて行くのは嫌だけれど、僕が侯爵になつたら又た来るかも知れないよ。君(きみ)と僕は親友だから手紙をよこしてくれ玉へ。(四回上、セドリック→ヂック)

(43) ヤツト、ソウカ、貴様(きさま)はおれに逢つて嬉しいと云ふのか?。(六回乙、侯爵→セドリック)

(44) 一寸、待て、貴様(きさま)は帽子をどふした? (九回甲、侯爵→ウィルキンス：馬夫)

(45) エロル夫人より御前(ごぜん)へ申上る伝言が御座ります。(五回下、ハヴィシヤム→侯爵・老侯)

(46) 御前(ごぜん)、誠におめで度う存じ升。(第七回(丙)、モドント(牧師)→侯爵)

(47) 御前(ごぜん)、其通りで御ぜい升、ニユークィツク様のお言葉に、若様が、此下郎のことをとりなして下さつした、といふことで、御ぜい升たから、御免の蒙つて、一度、御礼を申たいと存じて、ヘイ……(八回乙、ヒツギンス→フォントルロイ)

以上、男性の二人称代名詞について述べてきたが、男性は女性に比べると二人称代名詞の種類が多いことと待遇価値の低い語も存在することなどが特徴的

10) 小松(1998)では、「ぼく」が「きみ」と対をなして使用される傾向があると指摘している。

である。『小公子』における二人称代名詞は「あなた」と「おまへ」の使用が主であり、「おまへさん」と「おめえ」は衰退していく。また、待遇価値の低い二人称代名詞「きみ」「きさま」「ごぜん」などは男性に偏って使用された。このように男性は二人称代名詞の使用において、女性より選択の幅が広く、使用の制約も少なく場面状況に応じて柔軟に使い分けられたのであろう。

## 5. 終りに

以上、『小公子』における一、二人称代名詞を性差の観点から考察した。どのような人称代名詞をどのように使い分けているかを性別に分けて具体的に考察した。考察の結果、次のようなことが分かった。

一人称代名詞は、女性の場合、現代日本語と同様に「わたくし」と「わたし」に使用の偏りが見られる。一方、男性の場合は、「わたくし」「わたし」以外に「わし」「おれ」「おらあ」「おいら」「こちとら」「てまへ」「ぼく」「ぐろう」など多様であることが分かった。男性の場合は、古めかしい言い方が残っており、一人称代名詞からは高年齢層においては、江戸語の名残もまだ残っている。江戸語の名残がほとんど廃れていた女性とは対照的であろう。

二人称代名詞は、男女共に「あなた」「おまへ」が主たる使用である。そして「おまへさん」の使用は男女共に残っているが、使用例は少ない。男性においては、一人称代名詞と同様に個性豊かである。要するに、男性の二人称代名詞は「おめえ」「きみ」「きさま」「ごぜん」などが使われている。なお、『小公子』に残された男性のみ使っている二人称代名詞は待遇価値の低いことが特徴的である。

以上、一・二人称代名詞について男女の差異から総括してみると、女性の場合は簡素化していく傾向(明治20年代に既に、現代日本語の人称代名詞とほぼ一致する)が強いようである。しかし、男性の場合は一・二人称代名詞の簡素化があまり進んでいないし、待遇価値の低い一・二人称代名詞も多く、江戸語の

名残も残っており、バラエティーに富んでいたことが分かった。

## 참고문헌

小島俊夫(1974)『後期江戸ことばの敬語体系』, 笠間書院

小松寿雄(1998)「キミとボクー江戸東京語の対使用を中心にー」『東京大学国語研究室創設百週年記念国語研究論集』, pp.667~685

杉本つとむ(1988)『東京語の歴史』, 中公新書

房極哲(2002)「『社会百面相』における一・二人称代名詞ー待遇表現の観点からー」『日本学報』51輯, 韓国日本学会, pp.61~71

房極哲(2003)「明治期における一人称代名詞「ボク」と「ワガハイ」」『日本学報』55輯, 韓国日本学会, pp.63~77

房極哲(2006)「『小公子』における女性語についてー終助詞の用法を中心としてー」『日本学報』69輯, 韓国日本学会, pp.39~52

松村明(1957)『江戸語東京語の研究』, 東京堂

Vanbaelen, Ruth(2003)「性差マーカーの「自然さ」ー小説文の会話文と実際の会話との比較ー」『日本語と日本文学』36号, 筑波大学国語国文学会, pp.54~67

❖ 투고일 : 2006. 12. 31
❖ 심사일 : 2007. 1. 25
❖ 심사완료일 : 2007. 2. 15